

Title	育子教諭書について
Author(s)	本庄, 榮治郎
Citation	經濟論叢 (1931), 33(4): 599-603
Issue Date	1931-10-01
URL	<a href="http://dx.doi.org/10.14989/130087">http://dx.doi.org/10.14989/130087</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號四第

卷三十三第

行發日一月十年六和昭

## 論叢

公私混合營業……………法學博士 神戸 正雄  
英國の重農主義者……………經濟學博士 堀 經夫  
マルクス地代論の解釋……………文學博士 高田 保馬

## 時論

滿蒙爭議の實相……………經濟學博士 作田 莊一

## 研究

金數量説に就いて……………經濟學士 松岡 孝兒  
ゼーリング教授の農業恐慌論……………經濟學士 靜田 均  
住居統計に就いて……………經濟學士 岡崎 文規

## 說苑

育子教諭書について……………經濟學博士 本庄 榮治郎  
商品勘定の損益分記法……………經濟學士 小菅 敏郎  
助郷不勤滞金の處分……………經濟學士 黒羽 兵治郎  
デューの「漁業經濟論」に就いて……………經濟學士 岡本 清造  
纖維工業と勞働……………經濟學士 菊田 太郎

## 附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

（禁轉載）

## 説苑

### 育子教諭書について

本庄榮治郎

#### 一

徳川時代に人口制限が廣く行はれたことは一般に知られて居る事柄であるが、之が對策としては(イ)信仰若くは教諭の如き精神的感化の方法により(ロ)又は物質的に手當米や育兒金を與へてその目的の達成につとめ(ハ)或は刑罰を課するが如き諸方法が採られた。此等諸方法の一斑については既に拙著<sup>\*</sup>に於てこれを述べたが、茲には子を間引かず、之を育て上ぐべきことを教諭するために發行せられた二三の小冊子について一言したいと思ふ。勿論當時の學者の著書中の或る部分に子を育つべきことを諭したのもあるが、それは茲では問題とせない。また小兒の育て方に關する冊子も二三瞥見したが、これも問題ではない。茲に育子に關

育子教諭書について

する教諭書といふは間引矯正のための冊子である。

#### 二

育子教諭書について拙著に於て既に一言したものは「子孫繁昌手引草」なる書である。わが經濟學部研究室所藏のものは、明治六年夏岩代國信夫郡福島中町米澤屋源八、鈴木屋平右衛門、同九右衛門が木版を自彫して施本せしもので、四六判形の大きで始めに子かゝしのゑづと題して壓殺の圖を描き、女のこゝろの姿として鬼面に變ぜる圖をその裏に掲げ、それに解説を附し本文は三枚のものである。その一節に曰く。

「子故に貧乏するにあらず、こどもが身上のやせに成ば、子の<sup>(物)</sup>ない者は金持に成善なれども、夫婦くらしや一人者にも貧乏人の有をみては、子の有なしによらぬ事を合點すべし子は邪竈<sup>(イ)</sup>にならぬわけは、芋を植れば親いもの廻りに、こいもいくらも芋を出せども、こ芋おや芋の邪竈<sup>(物)</sup>にはならで子芋が多ければ、かへりて親いも太る物也。芋のやせ也とてこ芋をかへて捨れば、其欠口よりくさりて却て親芋の痛と成、人間も其通りにて子供が多ても其子が面々福分をもち來りて生る故に、<sup>(イ)</sup>少も親のかせにはならぬ也。譬へば子芋にそれ／＼に根がはいてこやしを吸ゆえに親芋のかせ

\* 人口及人口問題 121—157頁

にならぬが如し。子返しをすれば其子のうらみにて家に災難多く、親の身上悪く成也。譬ば子羊を欠て捨れば欠口より朽りて親羊の痛に成がごとし。身代の爲に子返して、かへりて身代を悪するはおろか成事也。都て子どもの多いは目出度事にて家繁昌の基也。』

と説き、更に焼野の雉子のこと、鶏が羽を喰抜いて卵を温むること、其他の例を引きて動物の子を育つることを述べ、萬物の靈長たる人にして鳥獸に劣ることを戒めたものである。

小野武夫氏は陸中國紫波郡地方に行はれた「邊土民間子孫繁昌手引草」の本文の一節を引用し、或寺の僧侶がものした訓誡書であるとされてゐるが、その引用されてゐる部分は、右に述べた「子孫繁昌手引草」の本文の冒頭より半枚位までの所と大體同様である。然しそれが何時頃流布されたものであるかは記してない。

更に金澤春友氏編「寺西代官治績集」によれば、寛政四年乃至文政十年、陸奥塩に代官たりし寺西封元は、平易なる文言と農作物や鳥獸に例をとつて無學なる農民にも理解し得べき「子孫繁昌手引草」なる小冊子を編

し之を管下全村各戸に配布して間引矯正に資したものであるが、その全文とわが研究室所藏の「子孫繁昌手引草」とを對校するに、兩者趣旨に於ては全然同一であるが、卷初卷末の兩部分に於て多少異り、中部の處は同一であり、前に引用せし箇所は殆んど同一であることを知り得た。

以上の三者は書名も略ぼ同様であり、流布の區域も同一地方であり、若し寺西代官の頒布せしものが、最も古きものとせば、他の二者は其後それに倣つて多少改削し、更に翻刻流布したものであらうと思ふ。

### 三

わが研究室には更に「農業小兒示教辨」と題するものがある。之は四六倍判の大きで表紙とも八枚の木版刷であるが、出版年代は明かでない。同書の前半には農業に精勵すべきことを論じて居るが、後半は間引に關することを戒めて居る。即ち農業に不出精にして困窮に陥りたる結果、生兒を「戻す」「間引」などと稱して絞め殺すことは人倫人情に於てあるまじきこととなりと論

じ、『父母より我がからだをゆづりうけ、我が子を手に懸ころすは父母をしいするにひとし』とし、間引の如きことを行へば『神佛にうとまれ、天罰神罰、先祖の罰のがれがたく、極貧に落入』るものなりと説き、之れに反し『小兒を養育なすにおゐては其子成長の後、親へ孝行を盡し、農業をたすけ、子孫繁榮うたがいなし』とし、鳥獸に至るまで我子を育つるは親の役であるから、況や人間に於てあさましき仕業をなすは、天の道に逆ふものであるとし、赤子を養育すべきことを勧めて居る。

尙同書によれば著者の國にては困窮の者小兒四歳迄養育料御手當を下さるることを述べ、且其國にては女子を間引く習慣があり、出生届は男子のみ多く、女子出生は十人に一人もあるかなき状態なりとし、向後は『村役人五人組のもの心附、女子の出生届出候やうに制道いたすべき事なり』と論じて居る。

#### 四

宮城縣立圖書館には「育子編」と題するもの二種を收

藏して居るが、その中の一は「育子編」の外に別種のもの三種を合綴し「育子編」の表題の下に收藏されてゐるものである。而してその一冊中にある「育子編」も實は二部のものから成つて居る。一は木版刷五枚のもの、他は筆寫二枚のものである。前者はその奥書によれば寛政三年五月水戸本四町目江幡次郎右衛門の印行頒布する處であるが、翌四年八月仙臺八幡町伊藤治平が更に翻刻施本せしものにかゝる。その大體の趣旨は、

人は萬物の靈長であり人たるの道を知るべきである。然るに東國の人我子二三人もあれば、其餘は生るるをまちて殺す。是をまびく、をしかへすと名づけ、又は胎死と偽り、或は四十二の二歳子、丙午の生子は親に害ありとて、決してとりあげず、これ人道に欠くるの甚しきものではないか鳥獸は我子を殺すことなし、人にして鳥獸に劣るは耻つべきではないか。『たとひいかほど困窮にても生るるほどのもの餓死すべき道理はあらず、東國のうちにも平磯の濱は尤もこんきうの地なれども、一村の内一人もまひきころすことなし。されども餓死したるものはきかず』とし、貧者のみが間引くにあらず、富者も之を行ふ。間引の原因は『人々驕吝の意ありて、我子を見ぐるしくそたてまじと思ひ、或はてまへ／＼の勞のまさるをいとひ、または身代の不益

など思ひこゝろえたがひあることなり』とし、人道に背く行爲をなしては富貴も遂に貧賤となり、神佛の報を受く、諺にも子の多きを子寶しうがなごといふ。一人にても多く育て上げなければならぬとて『白金しろがねも銀ぎんも玉もなにかせん、まされるたから子にしかめやも』の古歌を引いて結んで居る。

後者は寛政八年十月仙臺の僧大底和尚が教化のために説いたものであるが、その大意は、間引のために、生ては老を養ふ助なく、死ては家を繼ぐ祭主なきに至り、田地は荒廢し、上下の困難、これより甚しきはない。貧苦の者も衣食の奢、酒色博奕遊藝等の費へを厭はざるに、赤子を養ふ費を厭ふは愧つべきではないか、鳥獸は一粒の貯なきも多くの子を育てる。人として鳥獸に劣るべきであらうか。天に従ふものは榮え、天に逆ふ者は亡ぶ。赤子を害するは君心に背き天に逆ふものである。儉約を守り休日風雨をいとはず渡世の家業を怠らず相務め、惡習をあらため、荒田開發せば子孫繁昌すべきであると説いて居る。

「育子篇」と題する第二冊子は表紙とも十四枚の半紙判のものであるが、始めに序文とも見らるるものがある。

り、本文に述ぶる處は、前述の寛政三年の育子編及び同八年の大底和尚の教諭書を繼ぎ合せたやうなもので大體に於て同意同文である。然しその末尾に『右仙臺にて被仰渡御領分中板に御すらせ被成候て被相渡候書面の寫、落字誤字多く其儘に寫置候』とあるから、第一種の「育子編」が、後には仙臺藩に於て宣傳用の冊子として版行されたものであらうと考へられる。而してその版本を更に筆寫したものが本書であらう。

## 五

宮城縣立圖書館には更に「赤子養育勸進の引」と題するものがある。之は寛政六年秋、仙臺松音寺の僧大賢の述べたものであつて半紙型木版刷四枚のものである。第一枚目の表には老人が五人の子供に取り巻かれてゐる圖があつて、その上部に『ぜに金よりも孫子のたからがうれしひじや』あゝ、わしらがそだつたら、ぢいさんは大福長じやそい』の文句が記してある。本文は『むかしよりかしこき人は金玉を寶とせず、人を寶とせり。國のおこり、家のさかへるは、人のおほきによら

ざるはなし』の句を以て始まり、和漢の例を引いて人を殺すの非なること、子を養育するの自然の道なることを説き、富貴貧賤は決して子の多少に拘はらざることを論じ、一産に二子三子を擧ぐるは耻づべきことではなく、目出度きことであり、四十二歳の時をこへて生れし子は（前掲の四十二歳の二歳子の謂か）親に崇るなどいふは誤りである。赤子を殺すものは烏獸草木にも劣り、いつか天の罰、人の咎を蒙るべきものである。富家の者は貧家に一金若くは斗米を施して、赤子養育の爲めに力を盡さば、命永らへ家榮ゆるであらうと説き、赤子養育を勧めて居る。

## 六

以上は私の瞥見した二三の冊子について述べたのであるが、同様のことは他の地方にも行はれたことであらうから、同種の冊子は他にも多く存することであらう。右に述べた教諭書は何れも殺兒の人道に背く行爲である事を強調し、兒を養育するために貧窮となるものに非ることを説いて居る。間引の原因にしても、生

活の困窮といふことよりは、安逸のための間引と解してゐるやうにも見える。要するに此等の教諭書は經濟的原因や經濟的救濟方法は第二の問題として、先づ精神的の方面から、即ち倫理的觀念から殺兒の弊を改めんとしてゐるものである。この教諭書が果して幾何の感動を世人に與へ、如何なる効果を收めたかは、今之を明かにすることを得ないが、物質的の救濟策と相俟つて多少の影響を及ぼしたことは、之を認め得るであらう。

\* 京都にも四十二歳の二歳子は生れた時一度その子を捨てる形式を採る迷信がある。  
\*\* 拙著人口及人口問題第四章參照